

違う世界の小話

日之谷

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

(p_ix_ivでは)ガーディアンテイルズの小説は数あれど、男騎士が主人公のお話はと
ても少ないので書いてみました。

男騎士編はいつも書いている女騎士とは少しだけ違います。
良かつたら読んでつてください。

違う世界の小話

目

次

違う世界の小話

「ここはいつもの浮遊城…ではなく少し違う世界のお話。

「今日も平和だなー」

ヘラヘラした顔で浮遊城の見回りをするのはガーディアンと呼ばれる男騎士である。見回り後はこれといった予定はないはずなので、温泉にでものんびり浸かろうかと考えていたところに事件は起ころ。

「新入り君、ここにいたのかい!?」

息を切らしてやつて来たのは同じカンタベリー王国のガーディアンであり、先輩のボブだ。

「ボブ先輩、どうしたんですか？」

「どうしたもこうしたも大変なんだ！」とにかく来てくれ！」

ボブのただならぬ雰囲気に何か大きな問題が起きたのだと察する男騎士。

「はっはい！」

走るボブに着いて行き、到着したのは旅館だった。

「ここは…旅館ですよね？」

「そうだよ！早く入つて！」

ボブに言われるままの勢いで扉を開ける。

「いい加減にしてよ！」

「こつちの台詞ですわ！」

「なにをー!!?」

マリアンとカリナとナリ、この3人が言い争いをしていた。

「ボブ先輩、3人に一体何があつたんですか？」

「それは…」

ボブは語り始める。

「数十年前」

ロレインがアップルパイが作つてくれたので、みんなで分ける事になつた。
カットをし、全員に配り終えたところで問題が起ころ。

カリナはティーセットを、ナリは急須と湯呑みを、マリアンはマグカップとコーヒー
ミルを持ってきた。

「お菓子には紅茶が1番ですわ」

「何言つてんのー！甘味には緑茶でしょ！」

「センス無いわね2人とも、コーヒーに決まつてるじゃない」

「「…」」

そこからは女性が3人集まれば姦しいともいうが、それ以上の言い争いが始まった。
そして見かねたボブが男騎士を連れてきて今に至る。

「そんな：飲み物の事で？」

事の次第を聞いて呆れる男騎士。

「あら、たかが飲み物と侮っちゃ駄目よ」

声をした方に振り向く男騎士とボブ

「リンダ！」

「リンダ先輩！」

「私たちが生まれるかなり昔の話だと、食べ物の好みで戦争が起きた事例もあるわ」

「食べ物の好みで？それはどういう事ですか？」

男騎士はリンダに質問をする。

「その国の名産品はキノコとタケノコで国民もそれを好んで食べていて、でもある日どちらが名産品としてより優れているかで言い争いが始まり、遂に武力を持つて決着をつけて最後は国ごと滅んだとか：って話をしている場合じゃないわね、早く止めないと」

旅館内は一触即発の雰囲気を出している。

「そうでした、3人ともストップストップ！」

3人の間に割つて入る男騎士。

「邪魔をしないでくださいまし？」

「ちょっと、どいてよ！」

「そうよ！この分からず屋共に教えてやらないと！」

3人とも男騎士に対してがなり立てる。

「落ち着いてつて…」

「貴方様には関係な…いえ、良い事を思い付きましたわ」

カリナが何か閃いたらしい。

「どの飲み物が優れているか、騎士様に飲んでもらい決めてもらいましょう」

「へつ？」

突然の話に呆気に取られる。

「上等よ！」

「ふふん、なら私の勝ちだね！」

2人ともやる気満々だ。

「という訳で、審査をお願いしますわね？」

ポンッとカリナに肩を叩かれる、止めに入つたので巻き込まれる事は承知していたが、これは予想外だ。

「ボブ先輩！・リンダ先輩！」

先輩方に助けを求めるようとするが、2人は話を振るなど言わんばかりにほぼ同時に顔を逸らした、どうやら助けは得られ無さそうだ。

「さあさあ、どうぞお座りになつて」

そのまま椅子に座らせる男騎士、目の前にはカットされたアップルパイと湯呑みとティーカップとマグカップが置かれる不思議な光景が広がつていた。

「ど…どりあえずコーヒーからで」

男騎士は普段から飲み慣れているコーヒーを飲む。

そして口直しにアップルパイを一口。

次に緑茶、アップルパイ。紅茶、アップルパイと順番に飲み比べる。

(うん：分からぬ！)

分からぬながらも必死に頭を働かせる。

(落ち着け自分：そもそもよく飲んでるコーヒーだつて眠気覚ましに飲んでるだけで特段好きという訳じやない、かといつて紅茶も緑茶もあまり飲まないから違いが分からぬい、だけど…)

チラリと3人を見る男騎士。笑顔ではあるが目が笑っていない。

何だか泣き出したくなつてきた、だが泣いたところで事態は解決しないだろう。

(何か良い手はないか：ないのか？)

「さて、そろそろ決めてもらいましょうか」

痺れを切らしたのかカリナが話し始める。

「1番美味しいのは紅茶ですわよね？」

「緑茶だよね？」

「コーヒーに決まってるでしょ？」

「1番：1番は」

「どの飲み物にも合う、ロレインが作ったアップルパイが1番かなーなんて…」

「「あ、!?」

マリアンはともかく、ナリヤカリナから出てはいけない淒みのある声が響く。

「な…なんてね、冗談、冗談！」

慌てて取り繕うも、3人とも視線は冷ややかだ。

「優柔不断どころか他に目移りなんて、騎士として：いえ、殿方として落第ですわね」

「へー、人間の中でも君はとびきりおかしい奴だったんだね」

「顔どころか思考までヘラヘラしているとか、ふざけてんの？」

じわりじわりと寄つてくる3人。

「ちよつちよつと、何で近づいてくるの？」

逃げようとするが右腕をボブに、左腕をリンダに掴まる。

「2人とも！離してください！」

必死にもがく男騎士。

「新入り、さつきのは無いわー」

「ごめん、リンダが押さえろって言うから…」

いよいよ3人が目の前までやつて来た。

「ちょ…ちょつと、やめつ来ないで…」

—浮遊城 中庭—

「むつ？」

「あら、ガラムどうしたの？」

「何か今、悲鳴のようなものが聞こえたような…」

「気のせいでしょう？それよりこのラム酒美味しいんだから飲んでみてよ！」

レイチエルは瓶に入ったラム酒をジョッキに入れ、ガラムに渡す。

「レイチエル、君はもう少し自制したまえ、この間のようなのは懲り懲りだぞ」「分かつてるわよ！」

「本当かね…」

ラム酒を一口飲むガラム

「ふむ：確かに美味い」

「でしょー！そもそもラム酒つてのは海にいると必要な栄養が取れなくなるから、保存も効いて美味しく飲めるようにしたお酒なんだから」

「ほう…そうなのか」

「たかがお酒かもしけないけど、どんな物にも意味つてのはちゃんとあるの、それなのに発泡麦茶が1番とかワインが良いとかおこがましいと思わない？どんなお酒でもこうして仲間と飲んでいるのが1番美味しいんだから」

「確かにそれについては同感だ、飲み物で争うなどとは馬鹿馬鹿しい事この上ない」

その馬鹿馬鹿しい争いが、すぐ近くで起きている事を2人は知る由もなかつた。

—おまけ—

「あら…緑茶もいきますわね」

「コーヒーもミルクと砂糖混ぜると美味しいね！」

「ふーん、スッキリとしてて紅茶も悪くないじやない」

かくして男騎士という共通の敵を持つ事で三つ巴の争いは収まった。

小さな火種が浮遊城全体に飛び火するという事態は避けられたのだ。

だがこの平和のもとに1人の若きガーディアンの尊い犠牲があつた事を忘れてはいけない：

ワールドクリア（ドンツ!!!）

「いや生きてるからね！」